

NEW

Legend～新しい  
伝説

もとなり

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

外の世界、日本に住んでいた早川 聡（はやかわ さとし）  
は妖怪の賢者、八雲 紫をオバサン呼ばわりして、隔離された  
世界、幻想郷に飛ばされてしまった物語である。

# 目次

この日新しい伝説が動き出した | 1



## この日新しい伝説が動き出した

あるところのある日、静かに伝説が始まろうとしていた。

「ここはどこだ？」

そこは、森、と言うか山であつた。

ところで、この男の名は早川

聡年齢は不明だ。

で、ここはどこかと言うと、読者には言おう。

ここは、「幻想郷」人から妖、神までも、あらゆる者達の居場所であり、存在意義でもある。

で、そんな所にこの男がなぜいるのかというと、それは遡ること半日前。

早川は地元では有名な悪ガキで、毎日のように喧嘩をしていた。

今日は喧嘩帰りに帰路についていた。

「よう、オバサン、そこどいてくんない？」

と、オバサン呼ばわりしたのは――

「あら、それは私のことかしら」

鬼と言うか妖怪というか、まあそんな顔をした、妖怪の賢者様であつた。

まあ、なんだ？賢者様の逆鱗に触れた早川は予想通り、神隠しにあい、連れてこられたわけである。

「アノ・・・クソババアがーっ!!」

と、叫んでみるも、帰ってくるのはやまびこだけであり、人もいなければ動物もない。

「なんだよもー、どうすれば良いんだYO!」

「くそ、こんな時に誰かいればな」

と、ただ、誰かに助けを求めた次の瞬間。

「どうしましたか?」

「!?!」

綺麗な新緑の色をした髪のに深緑色の双眸、コスプレのような服、そして整った美しい顔、

どれをとっても、早川のいた所にはいない美少女だった。

「良かった、助けてくれ、変な胡散臭い女に飛ばされたんだ、と思う」

「え？変な胡散臭い女？ああ、紫さんですね」

「ゆかり？そんなことよりここはどこ?!」

「ここは幻想郷の妖怪の山ですよ」

「へ？妖怪？」

「この娘は何を言っているんだろうか、と思いつながらも。」

「てか、幻想郷？」

「はい、幻想郷です、あなたがいた外の世界から隔離された世界です」

「つまり？何？」

「あなたは帰れないと思います」

「へエア?!」

「私も外の世界の住人でしたし、慣れますよ」

「慣れますよ、じゃなくて家族とかは?!」

「こちらの世界の1秒は向こうよりだいぶ早いので、もうあなたの知ってる家族は全員墓の中だと思えますよ?」

「嘘だろ？」

「知ってる家族は全員墓の中、つまり逆に戻っても面倒なことになると早川は考えた。」

「じゃあ、村とかまで案内してください」

「ええ、分かりました」

「着きましたよ」

「oh……」

そこは、何とも言えない、完全木製の民家があり、柵や、堀で、囲まれていた。「本当にここに住むんですか？」

「いや、ちよつとこれは、もつと気楽に住める場所はないんですか？」

「あるには、あるんですけど、その大家さんは怖いですよ？」

「?とりあえず連れていってください」

「じゃあこちらへ」

集落を逸れて、再び森のようなところへ、しかしさつきと違い、人氣が全く無いわけではない、石畳があるからだろうか。

「ここがその気楽に住める場所、博麗神社です」

「え?神社?」

「そ、それでは私は怖いので逃げます」

「え、ちよ!」

「またいつか会いましょう!」

と、そそくさと逃げ去って行った少女であった。

「さて、どうしたものか」

「何時までも鳥居の下にいる訳にはいかないし」



「とりあえず人がいるか確かめてみるか」

と、歩き出した早川の足元に――

グサツ！

「へ？」

足元には何やら怪しげな御札が刺さっていた。

「アンタ、誰？」

前を見るとそこにはやる気のなさそうなまたもや美少女がいた。

「え、早川 聡です」

「ふーん嘘じゃないみたいね、で何のよう？」

「しばらく泊めてもらえないで「無理」ええ？」

「無理よ、面倒臭いし」

「え、でもどこにも行く宛がないんです」

「無理」

「家事とか手伝います」

「・・・無理」

「働きます」

「よし、採用、上がりなさい部屋へ案内するわ」

なんだ？面接でもしてたのか？

「ここがあなたの部屋よ」

畳が9枚だから9畳か？とりあえず広かった。

「あと、隣は私の部屋だから来ないこと」

「除いたら？」

「殺す」

やる気のなかった少女に殺気が現れたので冗談では無いらしい。

「風呂はあつちで厠はあつち e t c」

「で、アンタの仕事は食料調達ね」

「うわ、ハードだな」

「うるさいわね、文句があるなら出ていきなさい」

「文句ありません！」

「よろしい！じゃあ行ってこい！」

全く、人使いの荒い娘だ。